

そこにいる、金魚 —2.5D Paintingが 生み出す 魅惑の世界

金魚絵師 深堀隆介展 平成しんちゅう屋〜行商編〜
2019.7.6[土]—9.1[日]



三日月(みかづき) (部分) 2013年

水

と見紛う揺らめきの中に無数の金魚が戯れる—現代美術家・深堀隆介の作品は、器に透明樹脂を流し込み、アクリル絵具で金魚を部分的に描き、樹脂を重ねまた描くという過程を繰り返して、金魚を立体的に浮かび上がらせる独特の技法によって生まれます。

深堀が金魚を描くことに目覚めたのは、大学卒業後に勤めたディスプレイの会社を退職、独立したときのこと。創作活動に行

き詰った深堀の目に、7年間、粗末に扱っていた部屋の隅の水槽でじっと生き続けていた金魚の姿が飛び込んできました。その美しさに衝撃を受け、惹かれたように金魚を描き出した深堀は、このことを「金魚絵い」と呼んでいます。

深堀は、器の中に金魚の姿が現れてきて初めて描けるといいます。樹脂の中の金魚は、水面を境界線にした“あちら側の世界”にいる—まるで器物の魂が金魚の形となって表出したかのように。はたしてそれは本当に存在しているのか? 見ているのに実はほそそこいない、不思議な世界に深堀の金魚は生きているのです。

この展覧会は昨年、深堀が自らの創造性を自在に発揮できる空間として、「美術館」を選ん

だことに始まりました。展示のフィナーレは、江戸時代(に)不忍池付近にあったという金魚店「しんちゅう屋」。小屋掛けに金魚のトロ舟、カラフルな金魚袋…祭り小屋を彷彿させるしんちゅう屋は、ほの暗い空間に妖しく輝きます。深堀芸術の集大成ともいえる「平成しんちゅう屋」、この展示によって新たな領域に踏み出そうとする金魚絵師・深堀隆介の渾身の作品をぜひご覧ください。

(館長 坪井朋子)
平成しんちゅう屋 展示風景 2018年
※インスタレーション作品イメージ



ベールに包まれた 一大コレクション、 初の一挙公開

光ミュージアム所蔵
美を競う 肉筆浮世絵の世界
2019.9.7[土]—10.27[日]

浮

世絵といえば、多色摺木版画が広く知られていますが、肉筆浮世絵は、浮世絵が自ら筆をとって絹や紙に描いた絵画です。光ミュージアム(岐阜県高山市)所蔵の肉筆浮世絵は質量ともに優れた内容を持つものですが、ここに名品の一端を紹介いたします。

「背中に描いてちょうだい」「ここですか?」こんな会話が聞こえてきそうな《遊女と亮》は、歌川豊春(1735?—1814)の筆です。「浮絵」と呼ばれる風景画を得意としたが、後年は肉筆画に専念、名手といわれました。二人の戯れも、豊春ならではの温厚な作風が品位を感じさせます。

手ぬいでの肩に掛けた女性が、涼風の天を仰いでいます。《緑台美人》を描いた歌川国芳(1797—1861)は、武者絵や戯画で人気を博しましたが、美人画においては市

井の女性像を得意としました。夕涼みに息づく瞬間をとらえています。

同コレクションは、京都や大阪、地方で活動した絵師の作品も含まれています。祇園井持(1755?—1815以降)は京都の人ですが、詳しい経歴が分かっていません。「守子」は赤ん坊を背負った少女が兄を止め、嬉しげに見つけて喜ぶ男の子を温かく見守っています。大きな黒い髪、太い眉を持つ顔立ちが強烈な印象を残します。

どの絵も繊細な面差し、艶やかな黒髪、精緻な着物の文様などに、絵師の卓越した画技が発揮されています。また、江戸時代の人々のさり気ない日常や個性を豊かに描き出し、時代を超えた親しみを覚えます。



歌川国芳 緑台美人(部分) 嘉永年間(1818-1828)

ミュージアム ショップ

深堀隆介「金魚絵師の時代」公認グッズを手に入れよう!

- A4クリアファイル 各432円(税込)
- A5クリアファイル 各378円(税込)
- さんとーとバッグ 各2,700円(税込)
- 八立御膳 緑蓋 9,180円(税込)
- 八立御膳 黒蓋 9,180円(税込)
- もふとーと 各540円(税込)
- もふとーと 各540円(税込)
- もふとーと 各3,240円(税込)

※「金魚絵師 深堀隆介展」期間中(7/6—9/1)のみの販売です。



本展は同コレクションの約420点から厳選した江戸時代中期から明治時代に至る111点点を展示します(展示替含む)。初の大規模公開となるこの機会を、どうぞお見逃しなく。(学芸グループ長 河内えり子)

▼祇園井持《守子》文化12年(1815)(部分)
▼歌川豊春《遊女と亮》寛政年間(1789—1801)頃



※本展を鑑賞する際は、光ミュージアム所蔵の肉筆浮世絵の世界 掲載作品はすべて光ミュージアム所蔵